

りんどうの新病害「褐斑病」の発生と対策

(園試 環境部・野菜花き部)

1. 背景とねらい

昭和60年に沢内村のりんどうで発生を確認した新病害は、61年になると西和賀地方を中心に多発し、現行の薬剤散布体系では全く防除不能のため、出荷停止を余儀なくされた圃場が続出した。一応、本病は岡山県や福岡県においても発生がみられ、「褐斑病」として学会で報告されたものの、病原菌は未知の糸状菌のようで、命名すら確定していない。当然発生生態も不明であり、今後解決を要する問題矣も多々あるが、秋田試験地の緊急課題として取り上げ、当面の対策を明らかにした。

2. 技術内容

1) 病徴と発生特徴

(1) 病徴：はじめの葉の表面に白色円形の小斑として現われ、後に拡大して褐変する。病斑が多数形成されると、葉枯れ症状とする。

(2) 発生時期と発病部位：8月上旬に発生し、下位葉からしだいに上位葉へと蔓延する。畦畔部の内側や北側などの、陽が当たらない部位での発病が多い。

2) 防除対策

初発期からマンネブ水和剤(600倍)、ダコニール1,000(フロアブル、1,000倍)、ダコニール水和剤(600倍)、銅水和剤(500倍)、ダイセンステンレス(2,000倍)のいずれかを茎葉散布すると有効である。

3. 指導上の留意事項

1) このほか葉に発生する病害に葉枯病があるが、本病は葉枯病と異なり、病斑内に小黑点(柄子殻)が形成されない点で識別できる

2) 同一栽培者であっても、発生の圃場間差が著しい。多発圃場は次年度も発生の多い傾向がうかがわれるので、そのような圃場では予防散布が必要である。また、被害茎葉を圃場には残さない。

3) 着うい期前までは、マンネブ水和剤・ダコニール水和剤・銅水和剤といった葉の汚れが目立つものの、葉枯病にも効果の多い薬剤を散布し、それ以後に汚れのないダイセンステンレスを使用するとよい。なお、花腐菌核病対策としてのトップジンM水和剤・ベンレート水和剤は、褐斑病には効果が少ないので、同時防除を行なう場合には、これらの薬剤をロブラール水和剤に代える。

- 4) 間引きが不十分で圃場や風通しの悪い圃場での発生が多いので、適正な基数に管理するとともに、畦の内部側にも薬剤がよくかかるように散布する。
- 5) ここにあげた防除薬剤は、いずれもりんどうに対する登録がないことから、適用拡大を農薬会社に要請している。

4. 参考文献・資料

- 1) 昭和61年度環境部試験成績書(病害虫) 岩手県園芸試験場
- 2) 昭和62年度環境部試験成績書(病害虫) 岩手県園芸試験場

5. 試験成績

表 リンドウ褐斑病に対する各種薬剤の防除効果

供試薬剤	希釈倍数	発病率 %	100 葉当た り病斑数	葉の汚れ
Zボルドウ水和剤	500	0.9	0.9	++
マンネブダイセンH 水和剤	600	1.8	4.6	++
ダコニール	500	0.1	0.1	++
ダコニール1000	1000	0.0	0.0	+
トップジンH 水和剤	1500	39.6	162.3	—
ロブラール水和剤	1000	18.8	51.9	±
トリフミン水和剤	3000	43.8	228.6	—
ポリオキシシンAL水和剤	1000	36.1	131.9	±
ポリベリン水和剤	1000	33.4	109.4	—
ダイセンステンレス	2000	6.1	7.9	—
サンヨール	1000	23.6	68.9	—
ベフラン液剤	1000	20.0	32.9	—
無散布		38.8	237.5	

++ 汚れが著しく、販売不可

± 汚れが少なく販売できる

+ 汚れがあり販売に難がある

— 汚れがない